

3. 11 あの時、私は……

どんな些細なことでも、あの時のことを自分の言葉で伝えていきたい。そして、今考えていることも。

ぐらぐらと強いゆれが小学6年生の私達をおきました。卒業式をむかえる前に休校になってしまいました。勉強も途中のまま、卒業をして、^皆とも満足にさよならを言えずに離れてしまいました。

地震が過ぎても、まだまだ大変なことはありました。津波や余震、火災や土砂くずれなどで二次災害がたくさんあり、数々の人が亡くなりました。私が住んでいるところは平野なので、津波は来ませんでした。気仙沼や石巻などの海岸沿いでは多くの被害が起きました。私の家は3日で電気がつきましたが、海岸ではそれどころではないようです。家も人も全て流されてしまい、希望も無くなってしまう。たとニュースで報じられていました。同じ宮城県に住んでいるのに、ここまで被害の差がはげしいなんて信じられませんでした。何か伝えることは出来ないか考えてみましたが、当時中学生になったばかりの私に出来ることは何もありませんでした。それに、他の地方を心配していられるゆりもありません。私の家も一部が壊れ、飾っていたおんなさまの人形が全て壊れてしまいました。顔がくたけていたり、首が取れていたり、見からない部分や道具もありました。片付けをしているときに、「まるで津波におそわれたかをみるみたい」と不気心ながらも思っていました。まだ見からない、行方不明者や、せうか、たんなどが現れているようでいたたまれなくなりました。^皆はどんな思いで亡き人の顔を見たのか、また、見つからない人を待っている気持ちには測ることもできないのか、様々な悲しみが込み上げました。近所の人も家が壊れてしまい、家族の友人の家が流されたなどの情報も入りました。亡くした人が悲し、亡くした人が苦しんだ。東日本大震災は絶対におそれることはありません。誰が悪いのかとは言えない。このもどかしさも大規模な被害も全て伝えていかなければなら

ないと考えている人はたくさんいるはずだ。もしあの時こうして
いけば、もし妹をしなげれば... など「もし」のことを考えて
あの時は戻りません。それから、この被害の対策を考へ行動
し、私が大人になったとき、少しでも悲しい人や苦しい人が増えない
ように今すべきことをして、1日を大切に生きようと思いました。

2

年

1

組

石川 綾音